

岡山マードック研究会、マードック夫妻との交流など

室谷洋三

マードック学会の新会長の塩田勉先生からニュースレターに岡山のマードック研究会について「その雰囲気、顔ぶれ、お話しになった内容、あるいは私のイギリスでのマードック再発見などのエピソードを書いていただきたい」というお言葉がありましたので下記のような雑文を書きました。

岡山でマードック研究会が設けられたのは1990年代です。私のゼミ修了生がもう少し勉強したいと考え、数名で発足しました。その中心的人物は森元洋子さんでした。彼女は年に数回の研究



岡山マードック研究会の主要メンバー
(08/06/1991)



研究会で発表後の記念写真

日には率先して会場の整備にあたりました。会場は今日のように施設は充実していなかったため、毎回、岡山大学教養部の正面玄関の上にある会議室を利用しました。そのためには教養部庶務課に申し出て許可を得る必要がありました。このほかにも黒板の整備など多くの雑務がありました。それを毎回、森元さんがおこないました。勿論何人かの協力者がいました。駒沢礼子さん、佐久川豊子さん達です。そのような努力の結果、入会希望者が次々と出てきました。徳原佳子さん、西前和世さん、寺西雅之・雅子夫妻などです。岡山市内在住ではなく広島県の因島から駆けつけた人(田頭衛子さん)もいます。最新鋭は小野順子さんです。

これだけの陣容が整いますと発表者の準備も熱が入り次第にレベルは向上しました。研究発表は始めはマードックの小説の作品論でしたが、次に私はマードックのインタビューと随筆に目を通すように指示しました。インタビューは参考になる内容があり、生真面目に読み、翻訳も続けました。その結果は大学教育出版社から『アイリス・マードック随筆・対談集』のタイトルで出版しました。

研究会ではマードック夫妻を囲んで発表を行いたいという希望が強くなり、私はお二人に招待状を差し上げました。お二人はそのような研究会を是非見学したいと言って来訪してくれました。研究会だけではなく、後楽園、瀬戸大橋も案内し喜んでいただきました。研究会にも出席くださり、会員は思わぬ宝物を獲得しました。

次に、私のイギリスに於けるマードック再発見についてですが、この点、私はまったくの幸運に恵まれたのです。私は当時岡山大学の教養課程の英語教育の責任者であって、その為にはごく上等の外国人教師が必要であると考え、そのような立派な人物を探し求めていました。しかしそ



瀬戸大橋見学中のマードック夫妻



夫妻来訪中の研究会全メンバーの記念写真
(上下段ともに 30/05/1993)

のような人物はめったにいません。そしてやっと見つけ出したのは Sheffiled 大学の Christophehr Heywood 教授です。私は彼を発見した時岡山大学の英語教育の為に全力を尽くした満足感に満たされました。しかしこれは岡山大学のためばかりでなく、私自身のマードック研究のためには全く幸運なことでした。Christopher Heywood 教授は学生時代オックスフォード大学の New College に属していましたが、当時の同 College の英文学担当の教授は John Bayley さんだったのです。Bayley 教授は当時マードックと交際中でした。当然三人は親しくなり、Heywood 教授は二人に関して色々なことを知悉しています。三人の交際は1990年代も続いていて、私もその仲間に入れていただきました。マードック夫妻の住居 (30 Charlbury Road) と Heywood 教授の住所の距離は自転車ですら15分ほどの近距離です。

Heywood 教授宅の backyard と応接室、マードック夫妻邸の kitchen room や応接室では会話に花が咲きました。

Heywood 教授は私の滞英中はお宅に泊めてくださいました。そのために私にとって願ってもないことに、トリオグループ (Murdoch, John, Christopher) はカルテット (Murdoch, John, Christopher, Yozo Muroya) になりました。私は1980年代と1990年代頻繁にイギリスに出かけましたが、マードックに関する知識はほとんどカルテット活動を通じて獲得しました。マードックは石の収集家で多くの石をあつめていることは誰でも知っていますが、それを家の中にどのように収めているのかを正確に知っている人は多くありません。マードック邸をよく訪ねた私にはよく分か

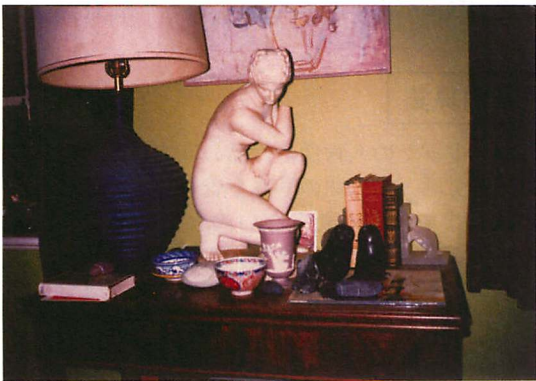


Heywood 邸の backyard で談笑中のカルテット
(左から2番目から順に筆者、マードック、ベイリー、ヘイウッド)



Heywood 教授のお宅の応接室で歓談中のカルテット
(左から順にヘイウッド、マードック、ベイリー、筆者)

ります。それをペンで説明するのは困難ですので写真で見ていただくようにします。



テーブルの上に綺麗にならべられています。「マードックの家は部屋も廊下も拾った石でいっぱい足を踏み入れる余地がない」と批評されていますが、これは全くのデマです。

マードックと楽しむ会話の材料はマードックが執筆中の作品でした。おかげでいろいろなエピソードを知ることができました。例えば彼女が *Nuns and Soldiers* を書いたのは、詩人 Stephen Spender の南フランスの別荘に宿泊中のことでした。マードックとスチーヴン・スペンダーは親友で彼女はしばしばこの別荘に招待されたそうです。しかもその地勢は作品の中で利用されています。マードックとスペンダーがそのような親友だとすると、マードック研究の新たな視点となり、新たな研究が始められるのではないのでしょうか。

1996年の夏のマードックを訪ねようとして便りを認めました。其れに対して私は次のような手紙

を頂きました。

John and I think of you with great affection, and it will be wonderful if you come to England and Oxford next summer. We have been in France, in Provence.

We have no more adventures in view at present.

Much love to you, dear Yozo,
From John and Iris

マードックは夏の避暑にはウェールズとフランスに出かけましたが、そこには Peter Conradi 教授と詩人スペンダーがいたからです。マードック夫妻がしばしば訪問したもうひとつの場所は、Dorset 州の Litton Cheney です。ここにはもう一人の親友 Reynolds Stone 一家が住んでいたからです。近くの Chesil Bank はマードックが溺れかけた海辺であり、*Jackson's Dilemma* の舞台にもなっています。

私がマードックとカルテットの交際をした中で自慢できるのは彼女との膨大な手紙の往復書簡と撮影した写真です。手紙につきましては、先年、発刊した『アイリス・マードックと宮沢賢治の同質性』の中で紹介していますから、それをご利用いただければ幸いです。本稿では随所で写真をお見せいたしました。



マードック邸のキッチンルームで酒を楽しみながら談笑中のマードックと筆者
(28/07/1991)